

2020 年 8 月 23 日（日）「^{きよ}潔き世代交代を目指して ～良き助言者の必要性～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:13-16

13 貧しくても知恵ある少年のほうが、もはや忠告を聞き入れない老いた愚かな王よりまさる。

14 彼は王国に貧しく生まれ、牢から出て王となった。

15 太陽の下、生ける者すべてが、代わって立ったこの少年に味方するのを、私は見た。

16 あらゆる民に果てはない。彼らの前にいた者はすべて、後の時代の人々に喜ばれない。

これもまた空であり、風を追うようなことである。

《新改訳 2017》伝道者の書 4:13-16

13 貧しくても知恵のある若者は、忠告を受け入れなくなった年老いた愚かな王にまさる。

14 そのような若者は、牢獄から出て王になる。たとえ、その王国で貧しく生まれた者であつても。

15 私は見た。日の下を歩む生きている者がみな、王に代わって立つ、後継の若者の側につくのを。

16 その民すべてには終わりが無い。彼を先にして続く人々には。後に来るその者たちも、後継の者を喜ばない。これもまた空しく、風を追うようなものだ。

【序論】

アンデルセンの寓話である『裸の王様』を知らない人はいないでしょう。現代でも、ある人を皮肉って言うのに使われることがあります。「うちの社長は裸の王様になっている」と言うとき、自分の周りにイエスマンばかりを置いて反対意見を受け付けなくなっている人の状態や、虚栄心を露呈しながら誰もその愚かな姿を指摘できなくなっている状態を指すでしょう。

《『裸の王様』あらすじ》

ある国に、新しい服が大好きな、おしゃれな皇帝がいた。ある日、城下町に二人組の男が、仕立て屋という触れ込みでやってきた。彼らは「自分の地位にふさわしくない者や、手におえないばか者」の目には見えない、不思議な布地をつくることができるという。噂を聞いた皇帝は2人をお城に召し出して、大喜びで大金を払い、彼らに新しい衣装を注文した。

彼らはお城の一室に織り機を設置し、さっそく仕事にかかる。皇帝が大臣を視察にやると、仕立て屋たちが忙しく織っている「ばか者には見えない布地」とやらは大臣の目

にはまったく見えず、彼らは手になにも持っていないように見える。大臣はたいへん困るが、皇帝には自分には布地が見えなかったと言えず、仕立て屋たちが説明する布地の色と柄をそのまま報告することにした。

その後、視察にいった家来はみな「布地は見事なものでございます」と報告する。最後に皇帝がじきじき仕事場に行くと「ばか者には見えない布地」は、皇帝の目にもさっぱり見えない。皇帝はうろたえるが、家来たちには見えた布が自分に見えないとは言えず、布地の出来栄えを大声で賞賛し、周囲の家来も調子を合わせて衣装を褒める。そして、皇帝の新しい衣装が完成すると。皇帝はパレードで新しい衣装をお披露目することにし、見えてもいない衣装を身にまとい、大通りを行進する。集まった国民も「ばか者」と思われるのをはばかり、歓呼して衣装を誉めそやす。

その中で、沿道にいた一人の小さな子供が、「だけど、なんにも着てないよ！」と叫び、群衆はざわめいた。「なんにも着ていらっしやらないのか？」と、ざわめきは広がり、ついに皆が「なんにも着ていらっしやらない！」と叫びだすなか、皇帝のパレードは続くのだった。（Wikipediaより）

この寓話に込められた教訓は複数あると思われます。権力に対して誰も真実を語ることができない社会の不健全さ、そこに安住している王様の盲目、更に、恐れ知らずな子どもの発言にゾロゾロ着いていく大衆の間抜けさなどが描かれているでしょう。

【本論】

この寓話は今日の箇所と深いつながりを持っておりますので、初めに引用させていただきました。今日のテーマを私なりに絞り込んでいった結果、「世代交代」というキーワードが浮かび上がってまいりました。どのような分野にも世代交代が存在するのであれば（仕事も、牧会も、子育ても）、自分自身の状況に置き換えつつ、それにふさわしいあり方を考えてみたいと思います。

本論 1. 愚かな王

貧しくても知恵ある少年のほうが、もはや忠告を聞き入れない老いた愚かな王よりまさる。
(4:13)

ここにはまず、一人の王が登場します。これが聖書登場人物の中で誰を指すのかということとは考える必要がありません。コヘレトは一般論として教訓的なポイントを示すため

のフィクションを語っているのです。この王がどのようにして権力を握ったのかについては触れられていませんが、王室に生まれ育ち、あまり苦勞もせずに座に居座り続けたのでしょう。彼はその地位に安住しているうちに、批判的な意見に耳を傾けるのを忘れてしまいました。そして、自分の政治のあり方に異議を唱える者を次々と解雇し、あるいは処刑していくうちに、誰も口を開けなくなっていってしまいました。周りにいるのはイエスマンばかりで、自分にとって都合のよいことしか言いません。国は王の思いのままに動いてはいるのですが、周辺諸国から見ると、そこには贅沢三昧を決め込む上層階級の者と、権力を恐れて身動き取れなくなった貧しい民衆の生活があります。しかし、外から見た現状を伝えようにも、自国の中ですべて完結してしまうので、手の施しようがない。「忠告を聞き入れない老いた愚かな王」は、このようにして国を破滅へと追いやるのです。

このことは、何も王に限った話ではないでしょう。仕事の現場で、長年責任を負ってきた人がいつまでもその座に居座り続けることによって、新しい時代に即した意見が聞き入れられないということが起こり得ます。このままでは会社は立ち行かなくなると言う人がいても、その意見を封じ込めてしまう。このようなことは、教会でも起こりうるものであり、高齢の牧師が同じ過ちに陥っている状況を見ることもあります。そして、斯く言う私自身も同じ轍を踏まないようにしなければならぬと肝に命じています。子育てにおいても、成人した息子をいつまでも子ども扱いしているならば、親として同じことをしていると言えるでしょう。子育てにおいても、子どもとはその時期に合った関わり方が求められます。また、自分自身が老いとともに判断力が低下してきたとき、かつて子どもを育ててきた者が、その子の意見に耳を傾ける必要が生じてくるでしょう。

本論 2. 貧しい知恵ある少年

13 節には「**貧しくても知恵ある少年**」というもう一人の人物が登場します。「少年」と訳された「**נָעָר**／イエレド」という言葉は、十代の少年というよりは「若い男性」を指します。一般的に、古代近東や旧約聖書においては、「年老いた王」は賢く、「貧しい若者」は愚かであると言われました（レビ 19:32、箴言 7:6-23）。人生経験を経て、分別がついた人の賢明な判断が強調されているのでしょう。しかし、その反対が起こりうることもしっかり教えられています（ヨブ 12:20、詩篇 119:100）。

彼は王国に貧しく生まれ、牢から出て王となった。（4:14）

本節の冒頭に出てくる「**彼**」が誰を指すのかは、難しい問題です。「若者」のことなのか、「年老いた王」のことなのか。詳しくは説教原稿の脚注をご覧くださいと思います。

ますが¹、聖書協会共同訳はどっちとも取れる訳し方になっています。13 節からの流れで素直に読むならば、「**貧しくても知恵ある少年**」の出自（生まれ）を説明する内容だと思われま。この若者は、奴隷のような身分に生まれ、「愚かな王」の支配下にあつて、不当な理由で投獄されたという設定でしょう。ヨセフの物語を思い起こさせます（創世 36:41-57）。しかし、この若者は牢獄において知恵をもって賢明に振る舞い、ついには国を支配する身分にまで高められました。民衆は「年老いた愚かな王」を退け、この若者の新たな統治を歓迎しました。その若者も当初は知恵によって国を治めていましたが、彼もまた歳を重ね、前王と同じ道を辿っていくようになります。

本論 3. 第三の王（新王の連鎖）

太陽の下、生ける者すべてが、代わって立ったこの少年に味方するのを、私は見た。(4:15)
本節の解釈も難解なのですが、「代わって立ったこの少年」と訳された部分は、原文を見ると「代わりに立つ第二の若者」という表現になっていることが分かります。しかも、ここで使われている「立つ」という動詞が未来時制であるところに注目する必要があります。私の理解では、ここにはこの物語における第三の王が登場しているということです。

①王室に生まれ育った愚かな王

②貧しい生まれで牢獄から出てきて王となった若者

③その次に現れた王

この解釈によると、第二の王は知恵によって一時的に国を治めたものの、その統治期間は短かったという話になります。与えられた知恵によって活躍できた時間は短く、彼もまた衰えていった（賢明な判断ができなくなった）。民衆の幻滅とともに、次の王が選ばれていきました。「第二の」(שני / シェーニー)という言葉は「次の」と訳してもよいでしょう。このことは何を教えているか。たとえ知恵が与えられ、一時的に良い働

¹ 14 節の「彼」について

- ・ 「若者」と捉える。一般的な捉え方で、新改訳、文語訳、NIV、NEB、NJB などが採用。
→貧しく低い身分の者であっても、知恵があるために王位に就く者があるという意味になる。
- ・ 「年老いた王」と捉える。口語訳が採用しているが、翻訳に無理がある。
→元々どういう身分の者が王位に就いても、愚かになりうるという意味になる。
- ・ 前半の「彼」を「若者」、後半の「彼」を「年老いた王」と捉える。新共同訳が採用。
→低い身分に生まれたが知恵と才能によって王になった者と、王国で高い身分に生れながら愚かさになった者とを対比しているという意味になる。

きをしたとしても、その働きを永続することはできないということです。事実、この世界では国民の期待と幻滅が交錯しながら、次から次へと新たな統治者が立てられ続けています。

あらゆる民に果てはない。彼らの前にいた者はすべて、後の時代の人々に喜ばれない。

(4:16a)

新たに立てられた王に対する民衆の歓迎の挨拶は、その度に繰り返される。しかし、「後の時代の人々」が彼のことを喜ぶとは限らないのです。老いるということの厳しい現実が表されています。若い日に良い仕事をした人であっても、民衆はその人が老いて判断力を失っていくと、過去はどうであれ心が離れていってしまう。そして、次の人が求められるのです。コヘレトはそのような現実を見て、再びため息をつきました。

これもまた空であり、風を追うようなことである。(4:16b)

【結論】

今日の箇所では「世代交代」における普遍の課題が呈示されていると言ってよいでしょう。これは、一般世界でも教会の中でも等しく起こりうる問題です。素晴らしい働きをしてきた人も、いつしかその働きが「主のもの」ではなく「自分のもの」となってしまうとき、名誉を求め、いつまでも古い椅子に座り続けるということが起きてきてしまう。そのような姿は痛ましくも、民衆は彼がかつて遂げてきた業績ゆえに率直に現実を伝えることができないのです。人はそうなる前に自ら退かなくてはなりません。聖書にはその成功例も失敗例も多く書かれています²。人生の山を降りることは、登る以上のエネルギーが必要だと言われます。なぜなら、その頃には体力も精神力も低下しており、目はかすんでくるからです。また、私たちも経験しているように、登山においては、登るよりも降る方が膝に多くの負担がかかります。では、その時期を迎えるまでに私たちはどのように歩んでいる必要があるか。老いた日の自分をイメージしながら、スムーズな世代交代を目指して歩むことではないでしょうか。これは、神がモーセに、パウロに与えた知恵でした。老いた日には、それにふさわしい形で主に仕える道がある。第一線から退いたとしても、目立たぬ形で周囲をサポートしていく特権と喜びがあるはずなのです。私自身も自戒として、このコヘレトのメッセージを心に留めております。また、聴衆の皆様にも、ご自分にとっての「世代交代」とはどういうことなのかを、それぞれ生きていらっしゃる世代やコミュニティに応じて考えていただければ幸いです。

² D.ワング『最後まで走り抜け』は霊的リーダーの引き際を教える良書。

【祈り】

歴史を支配しておられる神よ。人は生まれ、やがて老い、人生を終えていきます。この短い一生の間、各々に与えられた使命があります。使命を全うすることの重要性とともに、使命を引き継いでくれる人を見出していくことの大切さと難しさを覚えます。それが主の働きであるならば、初めから終わりまで清い心でささげられなければなりません。私たちにとって、今や人生の営みのすべては神のものです。それゆえに、あらゆる領域において、働きを神にお返しする心構えで生き、次世代への潔きバトンタッチを遂げていくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
すべての物事に初めと終わりとを設け、御手の中で歴史を導き給う、父なる神の愛、
聖徒に福音宣教の使命を与え、各々の賜物に応じて働きの実を結ばせ給う、主イエス・キリストの恵み、
人生のすべての局面において、潔き世代交代を果たさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。